

16世紀アントウェルペンの 銅交易とヨーロッパ経済

中 沢 勝 三

はじめに

15世紀末から16世紀にかけてヨーロッパ経済の一大結節地として浮上したアントウェルペン市場にとって、銅交易は、香料や毛織物交易と並んで興隆の主要な契機をなすものとしてつとに指摘されてきた⁽¹⁾。本稿ではこの点の史実認識を一步深め、同時にイベリア半島、地中海および大西洋世界との関わりを視野に収めつつ、銅交易のもつ意味とその背景に横たわる問題を検討することにした⁽²⁾。

1. 16世紀ヨーロッパの銅生産と交易

16世紀に銅はどのような用途をもったであろうか。ヴェステルマンは、この点について、銅は、銅製品として、また銅線、銅貨の鑄造にあてられると同時に、合金の原料（錫との合金の青銅、異極鉍との合金の真鍮⁽³⁾）として広く用いられたとしている⁽⁴⁾。とりわけ15世紀末以降の経済活動の昂揚と共に、大砲の鑄造や造船業で銅に対する需要が高まった。そしてこの時期ポルトガルが海外交易を進める上で銅や真鍮製品を強く求めたこと（後述）が、銅の需要にさらに拍車をかけることになった⁽⁵⁾。

(1) これはアントウェルペン経済史の研究史上画期的意義をもつファン・フットVan Houtte,ならびにその学説の発展的継承者であるファン・デル・ウェーの立場である。この研究史の整理については次の拙稿を参照。「国際商都アントウェルペンの興隆 — 繁栄の契機をめぐって —」『一橋論叢』, 75の2, 1976年。

(2) 本稿は次の拙稿の続編といえるが、新しい研究成果を盛り込み、また対象とする時代を16世紀全体に広げた。「アントウェルペンの興隆と銅 = 香料交易」『文経論叢』(弘前大学人文学部), 14の5, 1979年。

(3) 異極鉍は18世紀半頃鉛の分離が可能となるまで真鍮製造にとって重要な意味をもった。

E.W. Herbert, 'The West African copper trade in the 15th and 16th centuries', in: H. Kellenbenz, ed., *Precious Metals in the Age of Expansion* (Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte, Band 2), Stuttgart, 1981, p. 120.

(4) E. Westermann, 'Tendencies in the European copper market in the 15th and 16th centuries', in: H. Kellenbenz, ed., *op. cit.*, p. 71. 銅の用途については別に注2に挙げた拙稿の注1も参照。

(5) Westermann, *op. cit.*, p. 71. なおヨーロッパの銅の生産と交易について一般的には次の叙述を参照。石坂昭雄他『商業史』, 有斐閣, 1980年, 125頁以下。

(銅生産)

16世紀のヨーロッパにおける銅の生産量はどれほどであったろうか。ケレンベンツは年間約6000トンという数字を挙げているが⁽⁶⁾、データを記す史料に欠落が多く、また各生産地の変動が大きかったため、この数値もそれほど信頼のおけるものではない。

そこでここではケレンベンツ等による最新の研究⁽⁷⁾に依って、主要生産地について生産規模とその推移の大筋を辿ってみることにしたい⁽⁸⁾。

まずスウェーデンの生産額は1570年頃まで年産約300トン以下であったが、90年代には600トンに上昇した(17世紀には3000トンにまで上昇)。またスペイン、ポルトガルについては数字を示せないものの生産高は低かったと予想され、南アルプスやトスカナ(イタリア)も生産高は少なかった。

こうしたなかでヨーロッパの銅生産の中心的な地域は、ハルツ山地からカルパチア山脈へかけての中央ヨーロッパとチロル・アルプス(アルプス東部)地方であった。

ハルツ山地ではマンスフェルト(中心地アイスレーベン)が重要であって、1506年には約1100トンの生産を記録し、1526年には2100トンに達した(のち減少して1554年には約785トン—その後回復)。この地域では他にイルメナウ Ilmenau, ザールフェルト Saalfeld, フィヒテルゲビルゲ Fichtelgebirge なども生産地として重要であったが、数値をあげることができない。

チロル・アルプスではザルツブルクも重要な産地であったがデータがない。最も重要な山地はファルケンシュタイン Falkenstein(1540年までに年産約533トン)とシュヴァーツ(同じく747トン)であった。またレーレルビクル Röhrebichl も1565年までに約420トンの産出高をもつにいたった。

スロヴァキア(カルパチア山脈沿い—今日ではチェコ領)では、中部と東部に生産地があり、中部(中心地ノイゾール)は1564年までに1000トンから1300トンを産出した。東部の生産量は100トンから125トンであった⁽⁹⁾。

以上のように一瞥しただけでも各生産地における産出高の変動が大きいことが窺えるが、次にヴェステルマンに依って主要3地域の15—16世紀の変動趨勢の大筋を示そう。15世紀後半ではチロル・アルプスが最大の生産地であって、次に重要性を帯びたのがマンスフェルト

(6) H. Kellenbenz, 'The organization of industrial production', in: *The Cambridge Economic History of Europe*, V, 1977, p. 492.

(7) 注3に挙げたケレンベンツ編の論文集は1975年に開催された第14回国際歴史学会議の第4部門第3部の「1450—1750年における世界の金・銀・銅の生産と交易」をテーマとした研究会の報告集であり、寄稿はケレンベンツの「総括」'Final remarks'を含め全部で17である。

(8) 以下主に次の「総括」に依る。Kellenbenz, 'Final remarks: Production and trade of gold, silver, copper, and lead from 1450 to 1750', in: id., ed., *op. cit.*, pp. 328 ff. なお前掲拙稿「アントウェルペンの興隆と銅—香料交易」では、ヴェステルマンに依って、チロル(中心地シュワーツ)、ハンガリア(ノイゾール)、マンスフェルト(アイスレーベン)についての産出高(一部趨勢)を示したが、彼によればこの3地域がヨーロッパの生産の8割から9割を占めたといひ、拙稿では上記3地域以外の生産については触れなかった。また本稿では17世紀に大きな意味をもつことになる日本産の銅には触れない。

トで、15世紀末ことに1496年以後スロヴァキア（ノイゾール）の銅生産が急増したというように整理できるだろう⁽¹⁰⁾。

（銅交易）

では当時のヨーロッパの銅の交易はどのようなものであったろうか。ケレンベントは、銅の需要地として当時の重要な金属工業地であったブラウンシュヴァイク、アーヘン、ニュルンベルクとミラノを挙げている。また銅の海上輸送の拠点として、ヴェニス、ダンツィヒ、アントウェルペン、アムステルダムとハンブルクをあげており⁽¹¹⁾、銅市場としてアントウェルペンが最も重要で⁽¹²⁾、フランクフルトがそれに次ぐと述べている⁽¹³⁾。

この点ヴェステルマンは、次のように銅の生産地とその需要の中心地との間にみられる興味深い関係を指摘している。つまり、チロル・アルプスの銅は南ドイツ、イタリア、フランス、スペインで販売されたのに対して、マンスフェルトの銅は主にアーヘンやストルベルク Stolberg の真鍮工場加工され、場合によってはニュルンベルクや北ドイツでも加工された。そしてハンガリア（スロバキア）産の銅は、ヴェニスや中部・東部ヨーロッパへ、またアントウェルペンやアムステルダムを經由してイベリア半島へ送付されたが、特にヴェニスとアントウェルペン経由でのイベリア半島に集中的に送られたというのである⁽¹⁴⁾。また、イベリア半島向けでは、1560年代以降のネーデルラントの反乱によって、経由地がアントウェルペンからアムステルダムとハンブルクに切り替わっていったのだと⁽¹⁵⁾。

以上のように16世紀のヨーロッパにおける銅交易でアントウェルペン市場が重要な位置を占めていたことが窺えるが、以下章を改めて同市場における銅交易の拡がりや実態を検討することにしよう。

(9) そのほかめばしい生産地を挙げると、ザクセンではシュネーベルク Schneeberg とシュレーマ Schlemma が1506年に約180トンというピークを記録し（1517年以後約20トン）低地シレジアではキールケ Kielce とシェニン Chenin では120-180トンを産出した。ボヘミアにも16世紀末から17世紀半頃迄年産235トンを産出したクラスリケ Kraslice (Graslitz) があつた。またイギリスも1580年以降年約135トンを生産した。Kellenbenz, 'Final Remarks', p. 329.

(10) Westermann, *op. cit.*, p. 73. 拙稿（「アントウェルペンの興隆と銅=香料交易」）でもその第1図で示したように、16世紀前半においてチロルの生産が比較的安定して高水準を保ち、スロバキア（拙稿では「ハンガリア」と表示）産銅の同時期において産出量の変動幅の大きいことを示した。またアメリカの植民地時代初期の銅生産についての研究はまだ満足できる段階に達していない。Kellenbenz, 'Final Remarks', p. 332.

(11) Kellenbenz, 'Final remarks', p. 330.

(12) *id.*, 'Wirtschaftsgeschichtliche Aspekte der überseeischen Expansion Portugals', in: *Scripta Mercaturae*, 2, 1970. S. 22; *id.*, 'Europäisches Kupfer, Ende 15. bis Mitte 17. Jahrhundert. Ergebnisse eines Kolloquiums', in: *id.*, hrsg., *Schwerpunkte der Kupferproduktion und des Kupferhandels in Europa 1500-1650*, Köln-Wien, 1977, SS. 335 ff.

(13) *id.*, 'Europäisches Kupfer', S. 335.

(14) Westermann, *op. cit.*, pp. 73-4.

(15) *ibid.*, p. 75.

2. アントウェルペン市場と銅交易

(アントウェルペンの繁栄)

アントウェルペンは16世紀のヨーロッパ経済にとって傑出した国際的市場であった。その繁栄は何よりも国際商業の中継地としての役割から招来されたものであって、それ故に15世紀後半以降の国際経済の動向、とりわけ国際交易で取引される諸商品が同市場を結節地として出入りし交換されるようになったことが決定的な意味をもった。この市場の国際商都としての繁栄は、繁栄へ向かいつつあるヨーロッパ経済全体によって押し上げられたということができよう⁽¹⁶⁾。

ところで本稿で採り上げる銅も、ヨーロッパ経済はもとよりとして、アントウェルペン市場の浮揚にとっても重要な商品の1つであった。この市場は16世紀ヨーロッパにおける最大の銅市場でもあった。

この銅は、アントウェルペンにおいて、とりわけ以下で論じるように胡椒を筆頭とする各種香料を求めるに当って、ヨーロッパ側の対価商品としてきわめて大きな役割を果たした。そして植民地交易を推進するポルトガルが対アフリカ、次いで対アジア交易を進めていく上でこの銅を調達した最も重要な市場がアントウェルペンであったのだ。すなわち銅市場は、ヨーロッパにおける最大の銅市場であったばかりでなく、イベリア半島、とくにポルトガルを介してアフリカ西岸、さらにアジアとの経済関係を深めつつある「世界」市場でもあった。

そればかりでなく、フッガー家等の南ドイツ商人がその銅を持ち込み、ポルトガルの香料を購入する上で最も大きな期待を寄せたのもまたこの市場であった。この点にポルトガルの香料と南ドイツの銅の結びつきがアントウェルペンを舞台とした経済的背景が存在したのである⁽¹⁷⁾。

(アントウェルペンと銅交易)

最大の銅市場となったアントウェルペンでの銅交易はいかなるものであったろうか。この点について、われわれは同市場における銅取引の規模と実態を直接窺えるような包括的史料とデータに恵まれていないのであるが、断片的データと傍証からその有り様を復元するほかない。

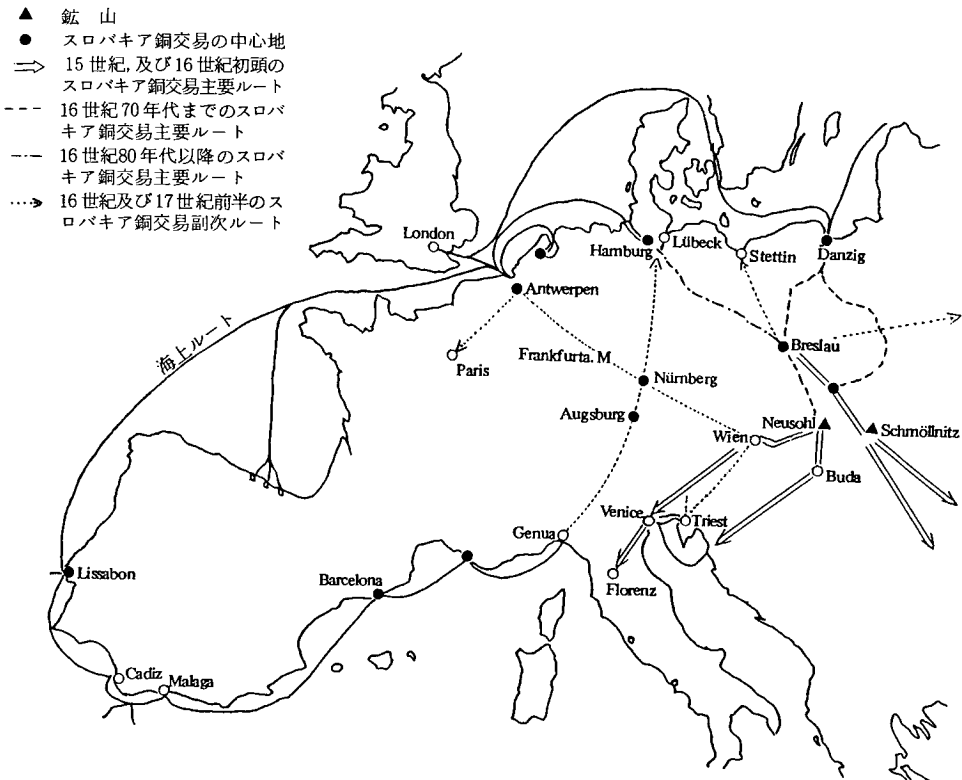
ケレンベンツに依れば、アントウェルペンの銅市場には中部ドイツ、スロバキア、そして1部はスウェーデンの銅ももたらされた。同時に彼はその規模について、メレンベルク Mollenberg に依って、同市場がヨーロッパの銅の約3分の2を扱い、残る3分の1をフランクフルト市場が商なると叙述している⁽¹⁸⁾。

(16) 但しヨーロッパ経済史における同市場の位置づけという課題はようやく緒についたところといていい。本稿もこの課題に対する寄与の一環をなす作業の一つである。

(17) この点先きに挙げた2つの抽稿でも論じたところであるが、以下この点をさらに解明することにした。

また彼は、1520年代においてマンスフェルト産銅がニュルンベルクに10,000 ツェントナー、そしてアントウェルペンに14,000ツェントナー送られ、同市場にはその他にフッガー家のハンガリア銅12,000ツェントナーが流入したという当時の記述報告を引用している⁽¹⁹⁾。それとは別に、ファン・デル・ウェーは1510年頃アントウェルペンには2万余ツェントナーのハンガリア（スロバキア）銅が市場に出まわったことを史料に基づいて記述している⁽²⁰⁾。ここで上述のヴェステルマンが指摘している銅産地とその需要地との密接な関係を想起されたい。彼によれば、アントウェルペン市場と最も関係の深い生産地はハンガリアであった。この点についてヴラコヴィク Vlachović の研究に依って少しその経緯を辿ってみよう。

スロバキア銅交易のルート



出典、次頁注(21)のケレンベントツ編著S.406

(18) Kellenbenz, 'Die Aachener Kupfermeister', in: *Zeitschrift des Aachener Geschichtsvereins*, 80, 1970, S. 104; id., 'Europäisches Kupfer', S. 335.
 (19) id., 'Die Aachener Kupfermeister', S. 104; id., 'Europäisches Kupfer', SS. 335-6.
 (20) H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy (14th-16th centuries)*, The Hague, 1963, I, p. 523. この時点がピーク時で、ハンガリア銅の54パーセントがアントウェルペンに向かった（このときヴェニス向けは3パーセントであった）。

彼によれば1494年から1546年までのノイゾール（今日のバンスカ・ビトリスカ）銅の生産高74,281トン（銀119トン）のうち、その半分がアントウェルペンに送付された（次いでポルトガルへ向かった）。このノイゾール銅は、15世紀から16世紀初頭にかけてウィーンなどを経てヴェニスやトリエステなどアドリア海岸の港へ送られていた（1部は別に南東のバルカン半島へ向かった）のだが、16世紀に入ると共に、その主要な流れをダンツィヒ経由でアントウェルペンに切り替えたのであった（同市場へ向けては1570年代まで――80年代以後はハンブルクを経てアムステルダムへ送られた⁽²¹⁾）。すなわちハンガリア銅は15世紀末以降その主要な販路をヴェニスからアントウェルペンに大きく転換したのであった⁽²²⁾。

ではマンسفェルトの銅はどのような経路を辿ったであろうか。ヴェステルマンに依れば、ここの銅の大半はアーヘンとストルベルクの金属加工業の原料として送られた。アーヘンの金属加工業、とりわけ真鍮工業は有名で、この原料となったのがマンسفェルト産の銅とアーヘン近郊で採掘された異極鉱であった。このアーヘンは、ケルンやデューレンDürenなどの都市とともに、その大青⁽²³⁾商人がアントウェルペンを訪れて経済関係を強めつつあった。こうした結びつきの上に、アーヘンの真鍮工業製品の販路としてアントウェルペンが大きな意味をもってきたのである⁽²⁴⁾。またニュルンベルクの商人も1490年頃からアントウェルペンで真鍮を販売するようになった⁽²⁵⁾。こうしてマンسفェルト産銅は――そしてニュルンベルク商人の動きにみられるようにチロル産銅（製品）の1部もおそらくは――ライン低地地方の金属加工業を介してアントウェルペン市場に大きくリンクしていったといえるのである。

（アントウェルペンの銅商人）

アントウェルペン市場の銅取引をリードした商人としてまず挙げられるのはレヒテルヘンズヘッツのグループである⁽²⁶⁾。ニコラス・ファン・レヒテルヘン Nikolaus van Rechtergen⁽²⁷⁾

(21) J. Vlachović, 'Die Kupfererzeugung und der Kupferhandel in der Slowakei vom Ende des 15. bis zur Mitte des 17. Jahrhundert', in: Kellenbenz, hrsg., *Schwerpunkte der Kupferproduktion und des Kupferhandels in Europa 1500-1650*, SS. 154-5,他にid., 'Produktion und Handel mit ungarischem Kupfer im 16. und im ersten Viertel des 17. Jahrhunderts', in: I. Bog, hrsg., *Der Aussenhandel Ostmitteleuropas 1450-1650*, Köln-Wien, 1971も参照。なおジャンンによれば、ダンツィヒ経由のアントウェルペン向け輸出は1510-13年で70,000 ツェントナーにのぼった。P. Jeannin, 'Le cuivre, les Fugger et la Hanse', in: *Annales, Economies. Sociétés. Civilizations*, 10, 1955, p. 232.

(22) ファン・デル・ウェーの提示したフッガー家のハンガリア銅の販路については、拙稿「アントウェルペンの興隆と銅＝香料交易」所載の第2図（21頁）も参照。ハンガリア銅のヴェニスへの送付は16世紀初頭のドイツ皇帝の対ヴェニス戦争で次第に落ち込んだ。そしてノイゾール産銅の最大の販路（1560年代まで）としてアントウェルペンが浮上した。この点 Vlachović, 'Produktion und Handel mit ungarischen Kupfer', S. 605. なお A. Weitnauer, *Venezianischer Handel der Fugger*, München, 1931, S. 77 も参照。

(23) 染料の一種。

(24) Westermann, *Das Eislebener Garkupfer und seine Bedeutung für den europäischen Kupfermarkt 1460-1560*, Köln, 1971, SS. 101-102. 他に拙稿「アントウェルペンの興隆と銅＝香料交易」も参照。

(25) Westermann, *Das Eislebener Garkupfer und seine Bedeutung*, S. 76.

(26) この商家については拙稿「アントウェルペンの興隆と銅＝香料交易」でも触れた。

は、アーヘン市長を勤めたラムベルト Lambertの子で、このラムベルトは15世紀末に異極鉍山⁽²⁸⁾の採掘請負人になっていた。

ニコラスは活動の本拠をアントウェルペンに移し、彼は1503年頃ポルトガルからインド産の胡椒を買い、これを南ドイツへ転売し、さらに銅や真鍮をポルトガルへ送っていた。彼は1498年にアントウェルペンに「アーケン館 Haus van Aken (アーケンはアーヘンのオランダ語名)」を所有したが、香料取引に失敗して1508年これをフッガー家に売却し、以後一時期フッガー家に従属した関係にあったようである⁽²⁹⁾。

ニコラスの死(1511年⁽³⁰⁾)後、事業は彼の娘婿アーヘン近郊出身のエラスムス・スヘッツ Erasmus Schetz の手に受け継がれた。エラスムスはヤン・フラミンクス Jan Vlaminc-ksen⁽³¹⁾ やマーストリヒト出身のエールト・プルイネン Aert Pruynem⁽³²⁾ と縁戚関係を持ち異極鉍山の採掘事業を発展させていった。

異極鉍の取引は主にアーヘンでなされたようである。エールト・プルイネンは1526年にヤン・フラミンクスとスヘッツと共同名義でアーヘンに2建の家を得たが、そのうちの1つは異極鉍(Galmei=Kalmis)にちなんでケルミスハウス Kelmis β haus と名づけられた。これは異極鉍取引の商館であっただけでなく銅も取引された。アーヘン近郊では、銅も産出した⁽³³⁾。アーヘンには1540年から69年までセバスチャン・フレミンクス(ヤンの従兄弟)がスヘッツ家の代理人として居住していた。そしてアントウェルペンではフッガー家の手に渡っていた「アーヘン館」も再びスヘッツ家の所有に戻り、1539年には新しい「アーヘン館」が建てられた⁽³⁴⁾。

エラスムスは若いときリスボンに滞在したこともあり、アフリカ西岸との交易を進めるポルトガルに対して最良の質をもった指輪等を提供した。同家はリンブルクの異極鉍山に独占権を有し、アーヘンの金属加工業に対して力を有しただけでなくその銅製品を買い付けたのであった。1545年エラスムスはグロッベンドクのマナーを購入して領主となった。またロッテルダムの文人エラスムスをアントウェルペンに招きよせたりし、さらにスペイン王家に貸し付けも行ったのである⁽³⁵⁾。

エラスムスは1550年に没し、事業はガスパール Gaspar (Kasparとも)、メルキオール Me-

(27) クラエス Claes ともいい、リヒテルヘン Richterg(h)em とも綴る。アーヘン近郊の村名にちなんだ姓といわれている。

(28) アルテンベルク Altenberg の異極鉍山については、C. Bruckner, *Zur Wirtschaftsgeschichte des Regierungsbezirks Aachen*, Köln, 1967, SS. 57 ff.

(29) Kellenbenz, 'Die Aachener Kupfermeister', S. 102.

(30) 注 26 の拙稿中の注(20)の注を参照。

(31) Vlamincx とも綴る。

(32) Proenen とも綴る。

(33) スヘッツ家は1525年から1550年にかけて銅の採掘にも従事した。Bruckner, *op. cit.*, S. 61.

(34) この部分は次のものに依る。Kellenbenz, 'Die Aachener Kupfermeister', SS. 102 ff.

(35) J. Denucé, *Afrika in de XVIde Eeuw en de Handel van Antwerpen*, Antwerpen, 1937, blz. 40-1, 196.

lchior, バルタザール Balthasar, コンラート Conrad の4人の息子に受け継がれ、同時に彼らは1552年クリストフ・プスイネン, アドリアン・ファン・ヒルスト Adrian van Hilst と共同でリンブルクの異極鉍鉍山を採掘し、銅や真鍮の製品をつくってアフリカに輸出した。またブラジルのサントスの近くに砂糖キビのプランテーションも保有した⁽³⁶⁾。ガスパールは1555年頃フェリーペ2世の代理人にもなったが、ネーデルラントの反乱の過程で事業はふるわず、1573年には「アーケン館」も売却され、1578年にはアルテンベルクの異極鉍鉍山も放棄するに至った⁽³⁷⁾。

アウグスブルクのフッガー家もまた16世紀前半にアントウェルペンの銅交易と強い関係を持った。フッガー家は、1490年代半頃にハンガリアの銅生産を掌握したあと、90年代の末にはその主要な販路をヴェニスからアントウェルペンに切り替えていった⁽³⁸⁾。1504年以降になるとハンガリア銅をダンツィヒ経由で同市場へ送り直接販売を行なうようになった。そして彼らはこの地でポルトガルの香料を買い付けた。このころからフッガー家のアントウェルペンとの結び付きが非常に強まり、先に述べたスヘッツ家の勢威を凌ぐようになった。その支店網はヨーロッパ中に広まると同時に、スペイン王家との関係も深まった。世紀後半に入ってフッガー家の銅交易は減退し、スペイン王家に多額の貸し付けを行なうようになった。そして16世紀後半に入って顕在化したスペイン財政の悪化によって、とりわけ1557年と75年のスペイン国庫の破産宣告によって大きな打撃を受けたのである⁽³⁹⁾。

(ポルトガルと銅)

西洋諸国の中でいちはやくアフリカ北岸から大西洋へ進出していった(1415年にセウタを攻略)のは、周知のようにポルトガルであった。この国は15世紀にアフリカ西岸を「探検」しつつ次第に南下していき、世紀末には南端の喜望峰を経てインドに到達したが、この間ポルトガルが行なった商取引、とくに各種香料の調達に当って対価として最も重要な意味をもったのが銅であった⁽⁴⁰⁾。そして16世紀に入るとポルトガルの香料交易にとって不可欠の「触媒⁽⁴¹⁾」の地位を占めるようになった。

ポルトガルの銅の産出量は少なかったから、当然外国でこれを求めなければならない。ポルトガルは海外交易開発の初期にヴェニスから多くの銅を入手したが⁽⁴²⁾、銅の調達先として次第にネーデルラントが重要性を高めていき、15世紀にはなかでもアントウェルペンが市

(36) V. Vazquez de Prada, ed., *Lettres Marchandes d'Anvers*, I-introduction, 1963, pp. 184-5.

(37) Bruckner, *op. cit.*, SS. 62-4.

(38) この点は先に述べたので繰返さない。

(39) 以上 J.N. Ball, *Merchants and Merchandise. The expansion of trade in Europe 1500-1630*, London, 1977, pp. 106-111. Jeannin, *op. cit.*

(40) Denucé, *op. cit.*, blz.

(41) ヘルベルトの表現。E.W. Herbert, 'The West African copper trade in the 15th and 16th centuries', in: Kellenbenz, ed., *op. cit.*, p. 119.

(42) Herbert, *ibid.*, p. 119.

場として最大の供給地となっていた。

15世紀末から16世紀の半頃にかけてポルトガルはアントウェルペンから年に銅を（原銅もしくは製品で）約1万キントル（約580トン）輸入したという。その変動の幅は、最低で6000キントル、最大では2万キントルに達した。ピーク時は1515年頃である⁽⁴³⁾。そしてこのかなりの部分がアフリカ西岸に向けられたといわれる。

ではアフリカ西岸へ輸出された銅はどのような加工製品であったろうか。16世紀初頭（1504年—07年）にサン・ジョルジュ・ダ・ミーナ Sao Jorge da Mina にいたポルトガル人は、その2年半の間に28万個の真鍮と銅製の指輪 *manilla*, 1582個のひげそり盆 *shaving bowl*, 520個の渡瓶 *urinal* と3192個の小型便器 *chamber pot* を受領したという記録がある⁽⁴⁴⁾。ポルトガル人はこの指輪と盆で香料と奴隷を購入した⁽⁴⁵⁾。16世紀後半に入っている記録でも、アフリカ西岸で好まれた商品として真鍮の指輪が挙げられている⁽⁴⁶⁾。

アフリカでは何故それほど真鍮や銅が求められたのであろうか。その理由は種々考えられるが、各種の金属製品はアフリカにあってはその製品本来の用途に供されたのではなかった点が重要である。銅はアフリカにおいては、ヨーロッパで金が果たした役割を演じたのだ。つまりそれを有する者の地位や威信を誇示するために、また装飾用に用いられた。そしてとくに遠隔地交易の交換手段（通貨）として用いられたのだ⁽⁴⁷⁾。そしてこれには、アフリカにあっては銅が金や銀に比して稀少価値を有していて、ポルトガル人の進出以前から銅はサハラ縦断交易の主要な交易品であったという事情がその背景にある⁽⁴⁸⁾。

このようにポルトガルのアフリカ、そして東インド進出にとって銅は戦略的にみてきわめて重大な意味をもつ商品であったが、ポルトガルはこれをアントウェルペン市場で入手したのであり、その取引を仲介したのが先きに述べたスヘッツ家やデ・ハロ De Haro, プルイネン, フラミンクス等在地の商家、それにフッガー家等の南ドイツの商人であった。

む す び に

これまでみてきたように、16世紀の世界交易において銅はヨーロッパの経済的な海外進出——とりわけアフリカ、アジアに対して——を進める上できわめて戦略的な意義を有する商品であった。その流れは国際商都であったアントウェルペンに一旦集中したあと、ポルトガルの買い付けによってヨーロッパ外の世界へ向かった（イベリア半島からヨーロッパ大陸内部へ向けての逆向きの流れとしてはポルトガルによる香料、スペイン領アメリカからの銀が

(43) V. Magalhães-Godinho, *L'Economie de l'Empire portugais aux XV^e et XVI^e Siècles*, Paris, 1969, p. 375.

(44) 奴隷交易については Denucé, *op. cit.*, blz. 47 f. を参照。

(45) Herbert, *op. cit.*, p. 121.

(46) *ibid.* ただしアフリカでも地域によって銅製品に対する好みが多寡異なっていたという。

(47) Herbert, *op. cit.*, pp. 122-3.

(48) Kellenbenz, 'Final remarks', p. 331.

特徴的な商品といえよう)。銅はヨーロッパが、アフリカ、アジアという「旧」世界の門戸を切り開く上で不可欠の交易品としての役目を負わされていたのである。

ところでわれわれは1550年代のアントウェルペンからイベリア半島向けの輸出交易の構成についてのデータを有しているが⁽⁴⁹⁾、それによれば価格構成で繊維製品が66.2パーセント(そのうち亜麻織物が43, 毛織物15パーセント⁽⁵⁰⁾)、小間物が10.2パーセント、金属は7.2パーセント占めていた。この輸出先きについて、スペインとポルトガルの区別をすることができないのは残念であるが、金属の86パーセントが銅であって、銅製品を加えるとその比率がさらに高まることが予想でき、アントウェルペンを介してのイベリア半島への銅交易の比重が高いことを確認できる。

またアントウェルペンが奢侈品を扱かう市場であったがために真の近代的市場でなかったという議論があるが⁽⁵¹⁾、少なくとも銅交易の実態からみた場合、16世紀においてその中心的市場が同市場であった以上、アントウェルペンが奢侈品の市場であったとは必ずしもいいきれないと考えるのである。この点さらにきめ細かく検討されなければならない。筆者はアントウェルペンが「近代的」市場であったか否かはともかくとして、16世紀に成立しつつあった「近代世界システム」の中心的市場であったことは確かだと考える⁽⁵²⁾。

(49) 拙稿「16世紀中葉におけるアントウェルペンのイベリア交易」、一橋大学地中海研究会編『地中海論集』1984年、153-4頁。

(50) この点次の研究の結論と符号する関係が示唆されて興味深い。服部春彦「16, 7世紀における新世界貿易とフランス」『史林』, 66の6, 1983年、60-1頁の論点。

(51) この点ウォーラーズテインの学説についての次の整理を参照。湯浅起男『文明の歴史人類学』, 新評論1985年、98頁以下。

(52) ウォーラーズテインの「近代世界システム」論についての筆者の姿勢を示したものとして次の拙稿を参照。「『オランダの覇権』をめぐって」『弘前大学経済研究』, 8号, 1985年、特に27-28頁。

≪Résumé≫

THE COPPER TRADE OF ANTWERP AND EUROPEAN ECONOMY IN THE SIXTEENTH CENTURY

Katsumi NAKAZAWA

Copper ware was strategic material in the early modern times in the world economy. In the second half of the 15th century the first position of copper production was held by the mining districts of the Alps, followed by

the Mansfeld area. Hungarian (Neusohl) copper production grew rapidly after 1496.

Among the markets, Antwerp played the most important role until 1570s (the second position held by Frankfurt-on-Main), and the Southern German merchants had a key position, though the native merchants in Antwerp played a much larger part in the trade in copper and spices at the beginning of the 16th century. The Schetz held a monopoly of the calamine deposits of Limbourg, and exported copper and brass wares in great quantities to West Africa via Portugal.

The Portuguese choice of Antwerp as their staple for the distribution of Asian spices after 1500 was no accident, since they had been selling West African pepper in the fifteenth century. The Portuguese created an expanding demand for copper to feed their trade with Africa and Asia.